神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

In Honour of Professor Kazuo Amano

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1998-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 幸和, Inoue, Toshikazu メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1688

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

天野先生を送る

井　上　幸　和

当時、というのは今から四半世紀以上も前、現在も継続している「日本古代ロシア研究会」が京都大学教養部ロシア語教室を中心に定期的に開催されていたころ、小生も新入会員として末席を汚していたが、10人足らずの会員の中に、大先輩格として天野先生がおられた。と言っても、親しくお話をする機会はほとんどなかったように記憶している。見るからに学究肌で、一言で言えば、他の研究会メンバーのなかでも、最も取っつきにくい先生の代表であった。

親しく、それもきわめて親しくお付き合いをさせていただくようになったのは、1983年、教授として本学にお迎えしてからである。爾来、本年３月に退官されるまでの15年間のお付き合いで得た知見から、天野先生の学問と人となりを、記させていただく。

本学にお迎えしてまだ日も浅い頃、京都大学教養部から本学ロシア学科への転任を決意された理由を、おうかがいしたことがある。― 教養部というところは、新入生を学部に送り出すまでのしばらくの受け皿に過ぎず、学生を育てて卒業させるという実感はほとんどなく、「気楽な」ところではあるが、拾年一日のごとく教室だけでの学生との接触であることが、物足りなかった。１年から４年まで学生と接触し、しかる後に社会に送り出すという本学のような専攻学科で教鞭を執ることが、長年の夢であった。― 小生からすれば煩わしいだけの教育者としての側面を、天野先生は、大きい魅力と感じられていた。事実、赴任されて以来、教室では折に触れてご自身の人生観を

吐露されつつ熱弁をふるい、また、人気ゼミの一つとして、ゼミ学生と文学論を闘わせておられた天野先生のお姿を見ると、まさに「水を得た魚」の比喩がぴったりであるように思えた。退官を間近に控えた昨年度の１年間、先生は何度となく、「これが最後の１年」と感慨をもらしておられた。

天野先生のご専門は、「文学」という狭い定義を越えて「言葉を介しての人間学」とでも言えるような、あるいは人間性を露にした＜記号論＞であったような気がする。その表現の最大の場が、生身の学生を相手にしての教室であったようである。「言語」を切り刻むという分析だけでなく、再び紡ぎ直すことに大きい労力を費やされ、結果としてそれが、ロシア文学の文体論的研究に結実したことがわかる。

1990年度には在外研究員としてパリ第４大学において研鑽を積まれ、先生のライフ・ワークとも言える、「19—20世紀ロシア・フランスの文化・文学的影響関係の研究」を進められた。ご退官後は、ご自身の宣言どおり、全くの自由の身になられて、日本と海外との半々の生活を実行されている。つい先日も久しぶりにお電話をいただいたが、それはパリからで、しかもこれからハンガリーに向かわれるとのことであった。

普段は平静この上ない先生が、ひとたび決心されるやまっしぐらに実行されるそのエネルギーは、先生よりは若いはずの小生がすでに持ち合わせないところであり、精神の若々しさで言えば、小生の方が先に退官して然るべき程である。しかし、通算すれば40年以上になろうかという先生の「勤続年数」から推し量れば、まさにこれからが先生にとっての、何ものにも束縛されない真の「第２の人生」、先生の長年夢見られてきた本当の旅、言葉を紡ぐ「文学の旅」の始まりなのかも知れない。

ありきたりの文句になってしまうが、先生に対しては特別な意味を込めて、ご健康に気をつけて、思う存分、理想の「第２の人生」を実行していただきたい。長年のお勤め、本当にお疲れさまでした。